

平成 22 年 3 月 31 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2009

課題番号：18520269

研究課題名（和文）社会運動としての文学——アフリカの HIV／エイズと小説

研究課題名（英文）Literature as a Means of Social Movement: HIV/AIDS in African Literature

研究代表者

大池 真知子（OIKE MACHIKO）

広島大学・大学院総合科学研究科・准教授

研究者番号：90313395

研究成果の概要（和文）：本研究課題は、社会運動における小説の働きを、アフリカの HIV／エイズをめぐる社会運動を例に考察した。アフリカの HIV／エイズのキャンペーンでは、映画、演劇、テレビ・ラジオ・ドラマといった視聴覚を使う物語芸術が応用されている。これらは受け手の五感に作用して、主人公との一体化をもたらし、HIV／エイズ問題にたいする共感的な態度を熟成する。それに対し小説は、社会の異性愛主義言説を主人公が内面化していく過程を批判的に表象する。読み手は距離をもってその過程を追体験し、分析的かつ情緒的にエイズ問題を認識する。視聴覚に訴える映画等と言語のみを用いる小説という両物語芸術は、HIV／エイズの社会運動において補完的な働きをしている。

研究成果の概要（英文）：The present research project has clarified how novels work in a social movement in case of the fight against HIV/AIDS in Africa. In campaigns against HIV/AIDS in Africa, various visual and audio narrative arts such as films, the theatre, TV and radio serial dramas are applied. They appeal the senses of the audience, and nurture empathy toward the issue. In contrast, novels critically represent the procedure of individuals internalizing the social discourses of heterosexism. The reader follows the procedure closely but in a detached way, and understands the issue emotionally as well as analytically. Both forms of narratives arts, that is, audio and visual arts and literary arts complement each other to bring the desired social transformation.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	1,100,000	0	1,100,000
2007 年度	900,000	270,000	1,170,000
2008 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	3,500,000	720,000	4,220,000

研究分野：人文科学

科研費の分科・細目：文学・各国文学・文学論

キーワード：アフリカ文学、エイズ

1. 研究開始当初の背景

80年代に始まったアフリカのHIV/エイズ対策は、医療分野での取り組みから社会全体での取り組みへと拡大してきた。アフリカでは1980年代半ばに、エイズの症例が各国で報告され始めた。当時の対策は公衆衛生の見地からなされ、リスク・グループに働きかけて感染経路を遮断するものであった。しかし90年代、南部アフリカで感染が拡大し、HIV/エイズの問題に対して社会全体で取り組む必要が認識された。96年には、それまで個別に活動していたWHOやユニセフといった国連諸機関が、「国連エイズ合同計画」(UNAIDS)としてまとめ、アフリカに巨額の資金が投入されるようになる。そして2000年前後には、アフリカ各地で大規模なキャンペーンが始まる。

キャンペーンの結果、アフリカのHIV/エイズ運動の目標は、「知識」から「行動変容」の段階へと移行した。つまり、HIV/エイズの感染経路やケアの仕方といった基本的な知識を普及させる段階は過ぎ、その知識をもとに行動を変容させる段階に進んだのである。

行動変容を促すために期待されるのが、人々の頭と同時に心に訴える芸術の役割である。とくに映画や演劇といった物語芸術においては、受け手は主人公の立場に身を置いて、その状況を追体験するため、HIV/エイズに対する共感的な態度を熟成し、行動変容に結びつけるのに効果的である。

研究代表者はこれまで、HIV/エイズのキャンペーンで応用される映画や演劇といった芸術活動について研究してきた(若手研究B、平成15年度から17年度まで、「ガーナにおけるHIV/エイズ演劇についての研究」)。

研究の過程で、HIV/エイズをテーマにする優れた小説作品が発表されていることが明らかになった。したがって本研究課題では、研究代表者の専門にもっとも近い小説に焦点化し、小説の表象を分析するとともに、HIV/エイズをめぐる社会運動全体のなかでの小説の役割について考察することとした。

2. 研究の目的

以上のような背景から、本研究課題は、社会運動における小説の働きを、アフリカのHIV/エイズに関する社会運動を例に明らかにすることをめざした。

3. 研究の方法

研究の方法は以下のとおりである。

(1) HIV/エイズのキャンペーンで応用される視聴覚に訴える物語芸術(映画、演劇、テレビ・ラジオ・ドラマなど)について、引き続き収集、分析し、それらの作用の特長を考察した。

(2) HIV/エイズを扱った小説を収集、分類した。以下の5つである。①若者が性差別を乗り越え、性的な自己決定を行使するまでの成長を描くヤングアダルト小説②性的な欲望対象の頂点にいる20代の女のセクシュアリティを描く小説③性にまつわる社会の慣習を批判的に描く小説④ホモセクシュアルの性生活を描く小説⑤医療現場での矛盾を描く小説。

(3) 上記の5分類のうち、分析の焦点を①②③に絞り、テキスト分析を行った。焦点化の理由は、④と⑤は点数が少なく、①②③が

作品の中心であること、また①②③には、異性愛主義を鋭く批判する秀作が見られることである。①②③の各ジャンルごとに、とりわけ優れた3つのテキストを選び、個別に分析した。南部アフリカのボツワナの『はるか彼方』(Unity Dow, Far and Beyond, Gaborone: Longman Botswana, 2000; Melbourne: Spinifex, 2001)、東アフリカのウガンダの『熱帯魚』(Doreen Baingana, Tropical Fish, Amherst: U of Massachusetts P, 2005)、西アフリカのガーナの『花なしでなく』(Amma Darko, Not Without Flowers, Accra: Sub-Sahara, 2007)である。

(4) 上記の一般的な小説とは別に、草の根の執筆活動についても考察し、新たな物語執筆の可能性を探った。「メモリーブック」である。メモリーブックとは、草の根の女が、みずからの HIV/エイズの体験や家族の歴史を、子どもに宛てて記した小冊子である。2006年度に南アフリカ、2008年度にウガンダで調査を行った。前者はエイズに関する NGO の活動の先進的地域であり、後者はメモリーブックの発祥の地である。

4. 研究成果

(1) HIV/エイズを扱った小説を、そのほかの物語芸術作品と比較分析することで、HIV/エイズをめぐるアフリカの小説と社会運動について、次のことが明らかになった。

①小説の言説作用の特長

小説というものは、個人に視点を置いて、個人を取り巻く自然環境、社会環境、人間環境を表象する。これを HIV/エイズの文脈に当てはめると、HIV/エイズを扱う小説は、1人ひとりの男女の視点から、社会のジェンダー構制を照射するということになる。すなわち、小説が HIV 感染をドラマ化すること

をつうじて表象するのは、我々1人ひとりが、女ないし男の立場に立ち、性関係を複層的に営み、社会のジェンダー構制を内面化し、女ないし男という自己を再構築するという過程であるといえる。

HIV/エイズの運動において、映画、ラジオドラマやテレビドラマ、演劇といったさまざまな物語芸術が応用されているが、小説は言語のみを用いることで、ジェンダー化された人間と社会の相互作用を、もっとも緻密かつ内省的に表象することができる。

②社会運動における小説の役割

したがって、HIV/エイズの世界運動における小説の役割は、次のようなものになるだろう。すなわち、小説は読者に、取るべき性行動を具体的に指南することはないが、社会のなかで性関係を営む特定の個人に、距離をもって共感させることで、社会が個人に及ぼすジェンダーの作用を読者に内省させる。その結果、感染は個人の自己決定によるというよりは、社会のジェンダー作用の結果であることを読者に理解させる。そして、感染した個人を糾弾するのではなく、感染させた社会、そして感染者を差別する社会を変革するよう、読者に働きかける。

もちろん、リアルな小説であるほど、単純な解放の物語は語らず、変革への道筋を指南することは避ける。むしろ小説は、ジェンダーの権力作用が女と男を構築する過程を、内省的に読者に迫体験させ、権力作用に関与しない限りこの世では男ないし女になれないという不可避性を、読者に問題化させる。優れた小説はこのようにして、HIV/エイズの世界運動を、より深みのあるものにし、したがってより有効なものにするといえる。

(2) 「メモリーブック」は、HIV/エイズをめぐる、草の根の女たちがわが子に宛てて

書く自分史、家族史である。メモリーブックについては、執筆者に試験的なインタビューを行ったのと、メモリーブック1冊を分析したのにとどまっておらず、研究の途上にある。暫定的な結論として、メモリーブックの執筆は、自律性と共同性を育むものであり、原初的な執筆であると同時に新たな執筆の可能性を示していることが分かった。

①メモリーブックは自立性を育む

一方で、女たちは自分の HIV/エイズの経験を文章化することで、その経験に意味と構造を与え、統御する者としての作者性 (authorship, authority) を身につける。このように獲得した権力は、女たちが感染を公表するのに大いに役立っている。彼女らはこれまでまとめた文章を執筆したことがなく、執筆の文化に属してもしない。その意味で、メモリーブックは、執筆が生じる原初的な場を見せてくれるものだと言える。

②メモリーブックは共同性を育む

その一方で、メモリーブックの執筆は、一般の孤独な執筆とは違って共同性を持ち、したがって、新たな執筆のありようを示している。なぜなら、メモリーブックには一定のフォーマットがあり、執筆者たちはたがいにアドバイスをしあいながら執筆を進めるからだ。また、宛先、つまり第一義的な読者である子どもの意見を内容に反映させることや、子どもと共同執筆することもある。さらに、執筆者たちが共通のフォーマットを使用して自分史、家族史を書くことで、一定の家族観が執筆者たちの間に形成されることも考えられる。この共同性という点で、メモリーブックの執筆は、一般の孤独で閉じられた執筆とは違う、新たな執筆の可能性を示していると言える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計7件)

① OIKE, Machiko, “A New African Youth Novel in the Era of HIV/AIDS: An Analysis of *Far and Beyond*’ by Unity Dow,” *African Literature Today* 27 (2010): 75-84, refereed.

② 大池 真知子、草の根の母が著す自分史／家族史：ウガンダの「メモリーブック」、*MWENGE*、39号、2009年、6-10頁、査読無

③ 大池 真知子、女を意味すること、女を生きること、エイズで死ぬこと——ドリーン・バインガナの『熱帯魚』分析、多民族研究、3号、2009年、40-63頁、査読有

④ 大池 真知子、「メモリーブック」を書く私——HIV陽性の親が記す家族史を文学の視点で読む、人間文化研究、1号、2009年、20-41頁、査読無

⑤ 大池 真知子、アフリカのHIV/エイズ小説が表象する性的な身体——アマ・ダーコの『花なしでなく』分析、黒人研究、78号、2009年、57-64頁、査読有

⑥ OIKE, Machiko, “Becoming a Feminist Writer: Representation of the Subaltern in Buchi Emecheta’s *Destination Biafra*,” *African Literature Today* 26 (2008): 60-70, refereed.

⑦ 大池 真知子、エイズの時代のアフリカで少女が成長する物語を語ること——ヤングアダルト小説『はるか彼方』分析、黒人研究、76号、2007年、27-33頁、査読有

[学会発表] (計5件)

① 大池 真知子、女性の語りから読み解く社会(4)ウガンダの母が記す「メモリーブック」——エイズ、自己、家族、日本アフリカ学会

第46回学術大会、2009年5月24日、東京農業大学

②大池 真知子、アフリカの女性作家が表象するHIV／エイズ——アマ・ダーコの『花なしでなく』、日本黒人研究会4月例会、2008年4月、京都キャンパスプラザ

③大池 真知子、アフリカが語るHIV／エイズ——映画・演劇・文学・メモリーブック、日本黒人研究会第53回全国大会シンポジウム「アフリカの半世紀を考える」パネリスト、2007年6月、京都キャンパスプラザ

④大池 真知子、ブチ・エメチェタを読む：女性学における「女の経験」論争、お茶の水女子大学21世紀COEプログラムジェンダー研究のフロンティア 英語圏ジェンダー理論・表象研究会第7回文献討論会「Donna Haraway, *Simians, Cyborgs, and Women: The Reinvention of Nature*を読む」報告者、2006年7月、お茶の水女子大学

⑤大池 真知子、エイズ「危機」と新たな「家族」の可能性——HIVに感染した若い娘の視点から、日本アフリカ学会第43回学術大会女性フォーラムシンポジウム「アフリカの『危機』：『家族』からの展望」パネリスト、2006年5月、東京外国語大学

〔図書〕(計2件)

①大池 真知子(共著)、広島大学情報メディア教育研究センター編、情報社会への招待：2010年版情報活用概論・基礎教科書、学術図書出版社、2010年、130-136頁(「情報(インフォーム)と行動(パフォーマンス)：アフリカにおけるエイズのキャンペーンを例に」)

②(訳書)大池 真知子訳、ガヤトリ・スピヴァク著、スピヴァク みずからを語る——家・サバルタン・知識人、岩波書店、2008年、207頁(Gayatri Chakravorty Spivak et al.,

Conversations with Gayatri Chakravorty Spivak, London, New York and Calcutta: Seagull, 2006の翻訳)

〔その他〕

ホームページ等

①大池 真知子、エイズ啓発の映画企画、『徳島新聞』2009年7月21日など、共同通信社から配信された複数地方紙に掲載された。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大池 真知子(OIKE MACHIKO)

広島大学・大学院総合科学研究科・准教授

研究者番号：90313395

(2) 研究分担者

なし()

研究者番号：

(3) 連携研究者

なし()

研究者番号：